『伊勢物語』と業平伝説

――愛知県を中心に――

近藤　さやか

論文要旨

『伊勢物語』の主人公とされる在原業平は各地に様々な伝説を残している。『伊勢物語』を基に、謡曲や古註釈の解釈、地名の由来などを含み、その土地に根差している。東北から九州まで広い範囲を舞台にした『伊勢物語』により、業平伝説も広い範囲に伝わっており、東下り関係の伝説と高安周辺の伝説が特に多い。しかし、これらは他地域ではあまり知られていない。

本論では、『伊勢物語』の舞台としてよく知られた愛知県知立市の八橋の伝説と、『伊勢物語』には登場しない愛知県東海市の業平の伝説を比較する。この二つの伝説には、東下り関係の伝説と高安周辺の伝説の要素が共に含まれていることがわかった。

伝説発生の流れを確認することによって、『伊勢物語』享受の方法を探るとともに、『大和物語』など説話的に広がっていく物語の形を考察する。

キーワード【『伊勢物語』、業平伝説、東下り、八橋、井筒】

一、はじめに

『伊勢物語』の主人公「男」は、本文に明示されないものの、在原業平を指しているとして、『源氏物語』をはじめとする多くの物語で読まれてきた。現代の注釈書でも、学校教育の場でも、業平を想定しながら読むことを前提としている。『伊勢物語』から業平という固有のイメージを消し去って読むことは困難であり、業平を想定した解釈によって、『伊勢物語』は今日まで読み継がれてきたともいえるだろう。

在原業平については、『日本三代実録』の卒伝や『古今和歌集』収載の和歌以外に人物像に近づけるものは少なく、各地に残る在原業平の「伝説」は『伊勢物語』を元にしており、その間には註釈書の解釈や、謡曲作品が影響しているものが多い。また、在原業平の

伝説については、小野小町伝説のように体系的に論じられてはおらず、未だ整理されていない状態である。

本研究では、全国に伝わる在原業平ゆかりの地とその伝説・伝承の中でも、特に愛知県内における業平伝説を調査し、『伊勢物語』から業平伝説が生まれ、土地に根差していく過程を確認する。物語享受の方法としての「伝説」を明らかにする意義があると考えられ、業平伝説研究の一端を担うものである。

二、業平伝説研究の現在――〈東下り〉関係

「業平寺」と呼ばれる京都の十輪寺、奈良の不退寺は比較的よく知られているが、「東下り」の折に訪れたと思われる各地にも残されている。また、「業平の墓」「業平塚」「業平橋」と呼ばれるものや、「業平」の名の付けられた地名も少なくない。

業平ゆかりの地として業平伝説を有する地は、大別すると、東下り関連と高安周辺に多い。ここでは東下り関係の業平伝説から見ていく。長くなるが、まず『伊勢物語』本文で東下り関係の地を確認しておく。

『伊勢物語』東下り・東国章段

第七段

むかし、男ありけり。京にありわびてあづまにいきけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらをゆくに、浪のいと白くたつを見て、

いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな

となむよめりける。

第八段

むかし、男ありけり。京やすみ憂かりけむ、あづまの方にゆきて、すみ所もとむとて、友とする人、ひとりふたりしてゆきけり。信濃の国、浅間の嶽に煙の立つを見て、

信濃なるあさまのたけに立つけぶりをちこち人の見やはとがめぬ

第九段

むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道しれる人もなくて、まどひいきけり。三河の国八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木のかげにおりゐて、かれいひ食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人、かれいひの上に涙おとしてほとびにけり。

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蔦かへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道は、いかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にもあはぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白うふれり。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子まだらに雪のふるらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける。

なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国のなかにいと大きなる河ありけり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれゐて、思ひやれば、かぎりなく遠くも来にけるかな、とわびあへるに、渡守、「はや船に乗れ、日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の、はしとあしと赤き、鴫の大きさなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

第十段

むかし、男、武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり。父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心つけたりける。父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人にと思ひける。このむこがねによみておこせたりける。すむ所なむ入間の郡、みよしのの里なりける。

みよしののたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる

むこがね、返し、

わが方によると鳴くなるみよしののたのむの雁をいつか忘れむ

となむ。人の国にても、なほかかることなむやまざりける。

第十一段

むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、道よりいひおこせける。

忘るなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで

第十二段

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、武蔵野へ率てゆくほどに、ぬすびとなりければ、国の守にからめられにけり。女をば草むらのなかに置きて、逃げにけり。道来る人、「この野はぬすびとあなり」とて、火つけむとす。女、わびて、

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり

とよみけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

第十三段

むかし、武蔵なる男、京なる女のもとに、「聞ゆれば恥づかし、

聞えねば苦し」と書きて、うはがきに、「むさしあぶみ」と書きてをこせてのち、音もせずなりにければ、京より女、

武蔵鐙さすがにかけて頼むには問はぬもつらし問ふもうるさしとあるを見てなむ、たへがたき心地しける。

問へばいふ問はねば恨む武蔵鐙かかるをりにや人は死ぬらむ

第十四段

むかし、男、陸奥の国にすずろにゆきいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけむ、せちに思へる心なむありける。さてかの女、

なかなかに恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれとや思ひけむ、いきて寝にけり。夜ぶかくいでにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

といへるに、男、京へなんまかるとて、

栗原のあねはの松の人ならばみやこのつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひをりける。

第十五段

むかし、陸奥の国にて、なでふことなき人の妻に通ひけるに、あやしう、さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

しのぶ山しのびてかよふ道もがな人の心のおくも見るべく

女、かぎりなくめでたしと思へど、さるさがなきえびす心を見ては、いかがはせむは。

東下り関連の地も『伊勢物語』第七～九段までの「東下り」で通過した地域と第十段、第十二～十三段の武蔵野の地域周辺にある。途中に、「友だちども」に東から文を送る第十一段と武蔵から「京なる女」に文を送る第十三段という東から都へ文を送る段を挟む。陸奥が舞台となる第十四段と第十五段は、第百十五段や第百十六段の昔男が陸奥へ行ったという話[1]と併せて、八十島で小野小町の遺骸を見つけ葬る伝説へ繋がっているだろう。

これらの伝説をA東下り章段関係、B高安関係として分類していく。

A　東下り章段関係

① 東京都東久留米市南沢（多聞寺）笠懸の松／埼玉県新座市（平林寺）野火止

業平は藤原氏の姫君・花鳥と音信を交わし、前後して東下りを計画する。京からの追手から逃げる途中、花鳥は捕えられて京に連れ戻されるが、業平は防火水路によって北国に逃げることができた。

② 埼玉県朝霞市膝折／埼玉県志木市柏町（長勝院）／埼玉県春日部市（業平橋）

業平の馬が膝を折って死んだ場所とする。ここから、追手の火を避けて新座片山郷に遁走した先で、田の面の長者である郡司長勝の

元に逗留する。長勝は自慢の美しい娘・皐（皐月の前）に食事の接待や身の回りの世話を勤めさせ、業平と娘は秘かに愛し合うようになる。父である長勝からは認められず、二人で逃げるが、途中で草原に火を放たれる。皐の「武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり」の和歌によって許された（火が和歌に感応して止まったとも）業平は婿になる。しかし、二人で陸奥に渡ろうとし、娘は千住の岬で家来に見つかってしまい、約束した春日部には来なかった。業平も家来に見つかり、その後は長者の家で幸せに暮らした。現在の春日部にある「業平橋」は業平が待っていた場所という。（娘を待っている間に都鳥の歌を詠んだとも。）また、平林寺には「この地で亡くなった業平」の塚がある。

『伊勢物語』第十二段を基にしているが、皐（皐月の前・五月の前とも）という呼び名といい、食事の接待というきっかけは『伊勢物語』第六十段「さつき待つ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする」の影響がうかがえる。また、平清盛が皐を妾にと申し出るが、長勝に断られ、攻め込み長勝と業平が討死したという歴史的に有り得ない話まである。

③　埼玉県春日部市（春日部八幡神社）

業平が都鳥の歌を詠んだ古隅田川の場所として都鳥の碑を残す。古くは武蔵と下総の国境であり、陸奥との往来に春日部の駅があった。社奥殿の下付近に渡船場があり、現在は川筋も変わり小川となったが、昔は「隅田川」という大川であったと伝わる。

業平は陸奥からの帰りに、行きに見た都鳥が恋しくなり、春日部宿に寄った。急に天候が変わり、雷鳴と豪雨に襲われた業平の乗った小舟は波にのまれてしまう。土地の人々が嘆き業平を葬り舟形の塚を作り丁重に弔った。塚は現存しないが、古隅田川に架かる「業平橋」に業平の名を残している。

『伊勢物語』第九段の隅田川の場面を基にしているが、場所と天候による趣が異なっている。雷雨と豪雨という展開は『伊勢物語』第六段の「神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ」を彷彿とさせる。

これら①～③は、石原昭平「業平・小町を歩く―武蔵野における新資料を中心に―」（『国文学　解釈と教材の研究』第二八巻第九号七月号、学燈社、一九八三年）、鈴木亨編著「武蔵野中部に連なる業平の伝説」（人と文化社、一九八七年）による。

④　埼玉県富士見市（姥塚）

陸奥から業平を忘れられず、追ってきた女が入間郡水谷で倒れ、「あと慕い武蔵野までは来たれども今ぞ露と消ぬるめる」と詠んで亡くなったのを嘆き、業平は「玉の緒の桑子はあはれ武蔵野の露と消ぬる恋ぞかなしき」と詠み女を手厚く葬る。女は四十を越えたほどの姥だったため、「姥塚」と呼び里人が長く弔ったというが現存しない。

「桑子」の語から『伊勢物語』第十四段の後日談と考えられる話である。和歌の「露と消ぬる」という表現には第六段の和歌の影響

がみられ、若くない女が追ってくる展開には第六十三段のつくも髪の女のイメージも重ねられているだろう。

⑤　東京都西東京市（旧保谷市）

里人が集まり、九月十六日に行う伊勢踊を楽しんでいると、きさきを連れ立った業平が現れる。一緒に歌や食事を楽しんだ後、保谷村神明宮社で一泊して旅立っていった。

④・⑤は前掲「武蔵野中部に連なる業平の伝説」により、鈴木亨氏は「きさき」と呼ばれていることから、『伊勢物語』第十段の「たのむの雁」の女、①の話に登場した花鳥が連れ戻されなかったバージョンとして想定する。

⑥　東京都葛飾区（業平山南蔵院）

「南蔵院のはじまり」（業平山南蔵院のリーフレット）によると、業平が隅田川で舟遊びをした時に、舟が転覆し多くの人が亡くなる事故が起きた。業平はその人々を弔い、像を刻み村の人に与え、法華経を写経して塚に埋める。これは「業平塚」と呼ばれ、その傍らに創建されたのが業平山南蔵院であるという。

「日本歴史地名大系第一三巻　東京都の地名」（平凡社、二〇〇二年）によると、対岸に業平塚があるところを「業平渡」と呼び、業平塚があるところに架けられた橋を「業平橋」と呼び、業平橋がある地名を「業平」と呼ぶようになったとあるが、この業平塚は現存しない。

また、天台宗南蔵院の境内に業平天神社があったが、同寺が葛飾区に移転した際（昭和元年）に廃社となったとある。現在、南蔵院は全く業平とは関係のない地元の伝承による縄に縛られた「縛られ地蔵」を祀っている。

この伝説も『伊勢物語』第九段の隅田川の場面を基にしており、③と同様に舟の不幸な事故が起きているが、業平は生き延びている。

⑦　東京都荒川区南千住（石浜神社）

境内に文化二年（一八〇五）に建立された都鳥の歌碑がある。都鳥歌ゆかりの地としては墨田区浅草の「業平橋」「言問橋」が有名だが、この白浜神社近くに白髭橋があり、荒川区教育員会の看板によると、渡しの位置は何度か移動しておりはっきりしないが、『江戸名所図会』では業平が渡った橋としていることを紹介している。

三、業平伝説研究の現在―高安関係

東の東下り関係に対し、西は『伊勢物語』第二十三段を基にした高安関係の伝説が多い。第二十三段は以下の通りである。

第二十三段

むかし、ゐなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、おとなになりにければ、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなむありける。さて、このとなりの男のもと

より、かくなむ、

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき

などいひいひて、つひに本意のごとくあひにけり。

さて年ごろふるほどに、女、親なく、頼りなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、河内の国、高安の郡に、いき通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもなくて、いだしやりければ、男、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前栽のなかにかくれゐて、河内へいぬるかほにて見れば、この女、いとよう化粧じて、うちながめて、

風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ

とよみけるを聞きて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

まれまれかの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯匙とりて、笥子のうつはものにもりけるを見て、心憂がりて、いかずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつを居らむ生駒山雲なかくしそ雨はふるとも

といひて見いだすに、からうじて、大和人、「来む」といへり。よろこびて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る

といひけれど、男、すまずなりにけり。

この段から派生したと考えられる伝承として以下の話がある。

B　高安関係

⑧　奈良県天理市櫟の本町（石上在原山本光明寺・在原神社）

明治の廃仏毀釈によって寺はなくなり、現在は境内の在原神社本殿のみとなっている。業平の住んだ跡として謡曲「井筒」にも登場し、井筒にちなんだ井戸がある。謡曲「井筒」の『伊勢物語』と古註釈の関係については、山本登朗「謡曲「井筒」の背景―櫟本の業平伝説」（『説話論集 第15集（芸能と説話）』清文堂、二〇〇六年一月）に詳しい。

⑨　大阪府八尾市　十三峠（業平道）

奈良県生駒郡平群町に伝わる業平道は、在原寺（在原神社）から、奈良盆地を西に越えて、業平が八尾に住む女性のもとに通ったといわれる。『日本歴史地名大系第三〇巻　奈良県の地名』（平凡社、一九八一年）によると、斑鳩町には自然石を組み合わせた岩井があり「業平姿見の井」と呼ばれている。これは、業平が女の元に通う際に姿見に使ったとも、女の無作法さに愛想を尽かして逃げてきた業平を追いかけた女が、業平の姿の映った井戸を見て飛び込んだとも伝えられている。

また、大阪府柏原市（業平道）にも、業平が高安の女（河内姫）

のもとに通うときに通ったとされる業平道が伝わっており、河内の国大県郡を通る柏原市も観光マップ「おいでよ業平道」を作成している。『日本歴史地名大系第二八巻　大阪府の地名』（平凡社、一九八六年）によると、十三峠という地名は江戸期に確立されたと考えられるが、河内と大和を行き来する竜田道として鎌倉時代以降文献にみられる。

⑩　大阪府八尾市（神立茶屋辻・玉祖神社）

業平が大和の竜田から十三峠を越えて、玉祖神社へ参詣の道中で福屋という茶屋の娘　梅野をみそめ、その後しばしば通って来るようになった。会いにくる時はいつも近くの松の木から笛を吹き、梅野に合図をしていたが、ある日笛で合図をせずに来てみると、東窓が開いていた。中をのぞくと、梅野が自分で飯をよそって食べており、それを見た、業平は興ざめして帰ってしまう。気づいた娘は後を追うが業平は去った後で、娘は悲しみ身を投げてしまった。そのため、高安の里では、今でも東窓を嫌い、これを開けると娘の縁が遠くなるという言い伝えがある。高安地域で東窓を忌むのは、山から吹き下ろす風を避けるためという地形の問題があるが、今瀬米造「なりひら河内通いの伝説」（『河内どんこう』43、やお文化協会、一九九四年）など、高安に残る伝説である。

また、業平が合図に使っていた一節切の笛は玉祖神社に置かれ、現在は八尾市立歴史民俗資料館に保管されているらしいが常設展示ではない。業平が会いに来て笛を吹くという描写は『伊勢物語』第六十五段の「この男、人の国より夜ごとに来つつ、笛をいとおもしろく吹きて、声はをかしうてぞ、あはれにうたひける。」の影響が考えられる。

『伊勢物語』第二十三段の高安の女の話であるが、「茶屋の娘」という時代に合わない設定になっている。また、最後に業平を追い、会えずに身を投げるという展開には第二十四段の影響もみられるだろう。この話は「なりひらの恋―高安の女」という演劇にもなり、平成二十年二月に上演されている。

この他にも東下りと高安関係以外の業平ゆかりの地とされている場所がある。

⑪奈良県奈良市（不退寺）

業平の祖父にあたる平城天皇が譲位後に平城京の北東に移り、萱野御所と呼ばれた場所。「業平寺」とも呼ばれ、業平自作と言われる聖観音像がある。毎年五月二十八日に業平忌の法要を行っている。

⑫京都府京都市右京区大原野（十輪寺）

本堂の後ろの丘の上に業平塚があり、業平閑居の地と伝えられる。

⑬京都府京都市西京区大原野（入野神社）

三つの五輪石塔があり、中央が業平の母伊都内親王、右が業平の父阿保親王、左が業平の墓とされている。

また、「業平の墓」とされるものはこの他に、滋賀県高島市マキノ町在原、京都市左京区吉田山、奈良県吉野郡天川村、熊本県山鹿市南島内曲などが確認できる。(2)

東の東下り関係伝説と西の高安関係伝説に分けて紹介したが、真中に位置する愛知県にも業平伝説がある。都を中心に見れば、『伊勢物語』の時代としては東に分類される尾張と三河だが、伝わる内容には西の高安関係との共通点もみられる。

四、愛知県知立市における業平伝説

⑭愛知県知立市（八橋）

「八橋」は『古今和歌集』巻第九（羈旅歌）四一〇番歌と『伊勢物語』第九段で「かきつばた」の折句が詠まれた地とされている。無量寿寺は寺伝によると慶雲元年（七〇四）の創立、現在のような杜若庭園は、文化九年（一八一二）方巌（売茶）和尚による再建時に作られたとされる。

ちなみに、業平訪問以前に「八橋」の地名の由来となった親子の伝説がある。それは、（鉄山）三井博『文学伝説の里　三河国八橋』（一九七一年、八橋旧蹟保存会）によると、昔、野路の宿と呼ばれていた頃に、羽田玄喜という名の医者がいたが、病で亡くなってしまう。妻は残された二人の児を養うために山や浦に出かけるが、ある時子供が浦で深みにはまり二人とも亡くなってしまう。嘆き悲しんだ母は尼になり無量寿寺で子供らの菩提を弔いながら、本尊の観世音菩薩に、橋さえあれば子供たちは助かったと祈念していると、夢に観世音菩薩が現れ願いを叶えると告げる。翌朝、浦に行くと上流から木材が流れてきており、それを使って八つの橋を架けたというものである。

「水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせる」と『伊勢物語』第九段で説明される八橋はいわば「公式」の業平伝説の地であるが、第九段にはない話が伝わっている。

それは、都から女が業平を追って来たものの、八橋に着いた時に既に業平が去っていたと知り、悲嘆のあまり逢妻川に入水したという伝説である。この女は通称「杜若姫」（小野篁の娘とされる）とされ、彼女を弔った供養塔が無量寿寺本堂の裏にある。

また、無量寿寺の近くには、業平の死後、奈良の在原寺から分骨し、建てられたという在原寺や、業平供養塔などもある。この供養塔にたまった水をつけるとイボに効くという、業平とは全く関係のない言い伝えも付随し、地元に根差した一面を持っている。

約六十年前からかきつばたが見ごろの時期に開催されている「かきつばた祭り」や「杜若姫」を題材にした演劇も第四弾が上演され（まちおこし演劇『愛・かきつばた姫』二〇一四年九月）、市外からも多くの人が訪れており、まちおこしの一環として業平伝説が活かされている。

⑮愛知県東海市富田（業平供養塔）

東海市は『伊勢物語』に登場する場面の舞台ではないが、業平関連の伝説がある。⑮～⑰は東海市教育委員会が編纂した『東海市の民話』（ぎょうせい、一九九二年）による。

業平は東へ下る際に京都から伊勢まで行き、船で海を渡り、愛知県の知多の浜を入り江に沿って進み富田へたどり着くと、清水の湧き出る井戸のところで、女たちが追ってこないことを平穏さに安心しながら休む。しかし、船から降りてくる中に自分を慕って追ってきた女官あやめの姿を見つけ、そばの椎の木の上に隠れる。あやめは井戸の水面に映った業平を見つけ、業平会いたさに井戸に飛び込み亡くなってしまう。業平は自分を慕ってくれたあやめの供養のために、この地にとどまり亡くなったというものである。

村人たちは業平を弔い、供養塔を建て。子供ができると業平のような美男子になるように祈り、また、五輪塔の頭部にわら縄を縛って祈ると頭痛が収まるという言い伝えもある。

⑯愛知県東海市富木島町（貴船）

業平が伊勢の海を渡ってこの地についたときに、村人たちが都から高貴な方がいらっしゃると大勢出迎え、業平が船を寄せたところだから「寄船」という地名にし、のちに京都と同じ「貴船」に改めた。業平がよく参拝した鞍馬の貴船神社から分祀した貴船神社を作り、業平はこの地での生活を楽しみ、亡くなった後も村人が業平塚を建てて弔っているという。

⑰愛知県東海市加木屋町（美女ヶ脇）

業平が東下りの途中に、美しい女官を連れて加木屋町を通りかかったとき、女官は足を痛め、休むことになった。熱心な看病と村人のもてなしで回復するが、女はここで暮らすことを決意し、業平のみが旅立つことになった。女が住んだところを「美女ヶ脇」と呼び、女が亡くなると塚を建てて弔い、塚は形にちなみ、「業平烏帽子塚」と呼んだというが、現存しない。

⑱愛知県豊明市沓掛

豊明市に伝わる話は、池田誠一『なごやの鎌倉街道をさがす』（風媒社、二〇一二年）によると、道中の安全を願い、街道の峠の入り口で沓を掛ける「沓掛」という風習を業平が面白く思い、この地の名前になったというものである。また、鹿島神社には業平の歌碑「あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじとぞ思ふ」があり、この歌がこの地で詠まれたと伝わる。

これは『伊勢物語』第二十二段の和歌であり、第二十二段は以下の通りである。

むかし、はかなくて絶えにける仲、なおや忘れざりけむ、女のもとより、

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつなほぞ恋しき

といへりければ、「さればよ」といひて、男、

あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじとぞ思ふ

とはいひけれど、その夜いにけり。いにしへ、ゆくさきのことどもなどいひて、

秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜し寝ばやあく時のあらん

返し、

秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りてとりや鳴きなむいにしへよりもあはれにてなむ通ひける。

榊原邦彦は、「尾張の業平伝説」（『郷土研究』14　一九七七年七月）で「沓掛村の業平伝説に触発されてのことで、一度発生した伝説が輪を広げて波及して行くことを示すものであろう」と述べている。

これらは他の業平伝説と同じく、『伊勢物語』を基盤にしつつ、『伊勢物語』には描かれていない伝説説話の類の話が付随している。歌枕とは多少異なり、物語作品あるいは有名人ゆかりの地として、より多くの人々に興味を持たせるためであっただろう。⑭や⑮の業平の塚が身近な疾患に効くという力が付け加わっているのも、その表れであり、これは『伊勢物語』の説話化ともいえ、歌物語から説話文学作品への流れを垣間見ることができるように考えられる。

また⑭の「かきつばた」と⑮の「あやめ」という女の呼び名もよく似た花の名である。八橋という『古今和歌集』業平歌と『伊勢物語』で舞台となる地へ至るまでの通過地点であったかもしれないという可能性のある場所で発生した伝説が、⑮〜⑱と考えられる。東下りの過程で通過する尾張という位置は、都から女の足でも追ってくることが可能な距離であり、業平ほどの男であれば女が追ってくるという展開は④にもあったように享受において自然な発想といえる。

話の型としても、⑭で杜若姫が川に入水する点と⑮であやめが井戸に飛び込み亡くなるという点は共通しており、⑮は、女（紀有常の娘）が謡曲「井筒」で業平の冠と直衣を着けた姿を水鏡に映し、自らを業平と見て懐かしいと言う場面が源泉だろう。

このように、⑭と⑮の伝説は相互に影響を受けたように見られる表現がある。つまり、⑭の八橋のかきつばたという和歌に詠まれた花の名で呼ばれる杜若姫のパロディとも考えられる⑮のあやめという呼び名であるが、その死の場面となると、謡曲「井筒」の影響を受けたと思われる⑮のあやめは井戸の水鏡に映った業平を見て飛び込んでいる一方で、井戸や業平を幻視する要素はないものの、⑭の杜若姫も水死という共通点を持っている。

また、⑱の鹿島神社で業平が詠んだとする和歌は『伊勢物語』第二十二段であり、「井筒」の基ともいえる第二十三段の前段の話である。西から東へという位置関係と『伊勢物語』の章段配列の関わりも興味深い。

五、おわりに

『伊勢物語』第九段の一場面である愛知県知立市に残る業平伝説と、その知立市の業平伝説に付随して発生したと考えられる東海市の業平伝説を調査した。いずれも業平を都から追ってきた女の悲恋

の死が伝えられている。

東海市の場合は、都から海路を使ったならば通過したであろう位置ではあるが、内容は「かきつばた」に似た「あやめ」という名の女性の悲恋という知立市の伝説の明らかなパロディになっており、井戸の中に業平が映るという点には、謡曲『井筒』の影響もみられる。

また、渡邊昭五編『日本伝説大系（第9巻南近畿編）』（みずうみ書房　一九八四年）によると、和歌山県那賀郡貴志川町長山の根来村西坂本に、業平が小野小町に九十九日通った伝説がある。業平の妻になることを拒む小町が女中を連れて逃げ出し、業平が追いかけたところ、女中が犠牲となって入水すると業平は小町が入水したと思い後を追い入水してしまう。小町は二人を弔って小野寺という寺を建てたというが、寺は残っていない、というものである。

他の地域では、多く業平は追われる側で、女が業平を追って入水する型だったが、ここでは逆になっている点や深草少将ではなく業平が百夜通いしようとしている点など、さまざまな話や物語との関連が考えられる。

『伊勢物語』をはじめとする「歌物語」に分類される作品に『大和物語』があり、宇多天皇周辺の話が描かれる前半部と伝説・説話が多く続く後半部に分かれている。実在した有名な歌人や無名の人物の話が混在することで、相互に現実にあったかもしれないという雰囲気を醸し出していると考えられ、こうした各地域に残る業平などの有名人が登場する伝説を考察することで、『伊勢物語』や『大和物語』の研究に繋がる道が見えてくると考えられる。

今回の調査で主に愛知県内の二つの業平伝説を調査することによって、他地域への伝説から影響関係があることを垣間見ることができた。全国に残る業平伝説の地を調査し、体系的に考察していく研究の一端として、引き続き調査していきたい。

【付記】 本稿は平成二十六年度学習院大学人文科学研究所若手研究者研究助成（研究課題「『伊勢物語』と業平伝説―愛知県内を中心に―」）の給付を受けた研究成果の一部である。

注

（1）『伊勢物語』本文の引用は新編日本古典文学全集（福井貞助校注、小学館、一九九四年）

第百十五段

むかし、陸奥の国にて、男女すみけり。男、「みやこへいなむ」といふ。この女、いとかなしうて、うまのはなむけをだにせむとて、おきのゐて、みやこしまといふ所にて、酒飲ませてよめる。

おきのゐて身を焼くよりも悲しきはみやこしまべの別れなりけり

第百十六段

むかし、男、すずろに陸奥の国までまどひいにけり。京に思ふ人にいひやる。

浪間より見ゆる小島のはまびさし久しくなりぬ君にあひ見で

「何ごとも、みなよくなりにけり」となむいひやりける。

（2）『伊勢物語』第六十段に「宇佐の使」として大分県にある宇佐神宮へ行く話と第六十一段に筑紫（福岡県）が舞台となる話がある。後者では和歌に「たはれ島」（熊本県にある風流島。他にたばこ島、はだか島とも呼ばれる）が詠まれている。このように、九州も舞台となっているが、東下りほど伝説は残されていないようである。

ENGLISH SUMMARY

"IseMonogatari" and The Legend of Narahira
— Focusing on Aichi Prefecture —

KONDO Sayaka

Ariwara no Narihira the hero of the "Ise Monogatari", has left a variety of legends in various places. Based on the "Ise Monogatari", the interpretation of the Noh play or full annotation, and the like derived from place names, is rooted in the land. By the "Ise Monogatari", which was to be staged in a wide range of places from Kyushu to the northeast, Narihira legend has also been transmitted to a wide range of places, especially many travel is given to the legend of the Azuma-kudari relationship and the legend around Takayasu of relationship. However, these things are often unknown in other regions.

In this paper, we compare the legend transmitted to Yatsuhashi of that well-known, Aichi Prefecture Chiryu as the stage for "Ise Monogatari", the legend of Narihira transmitted to Aichi Prefecture, Tokai City does not appear in the "Ise Monogatari". The two of legend, it was found that the elements of the legend and Takayasu around the legend of the Azuma-kudari relationship are included together. By checking the flow of the legendary generation, together with exploring ways of "Ise Monogatari" enjoy, consider the shape of the story that will spread, such as in narrative manner "Yamato Monogatari".

Key Words: "IseMonogatari", Legend of Narahira, East descent, Yatsuhashi, Izutu